

ハンドブック ワンポイント レッスン

知っておきたい規則とルール

Question

中学生の部外指導者です。先日開催された県予選会の団体戦が相互審判で行われた際の出来事です。

前衛が相手のスマッシュをフォローしました。副審は「ドリブル」とコールと共に指差しました。ボールは極端にコースが変わり相手コートに入りポイントになりましたが、観衆から見ても明らかにボールはラケットに2回当たっていました。しかし、正審は「ドリブルではない」と主張し、決着が着きませんでした。最終判定は「ノーカウント」になりました。

この判定で良かったのでしょうか？

Answer

正審と副審の判定が食い違った場合は必ず協議される事が望ましい

この度のご質問の回答は歯切れが良くありませんが、ノーカウントとしてやり直すこととなりますので、「ノーカウント」で良かったと思います。

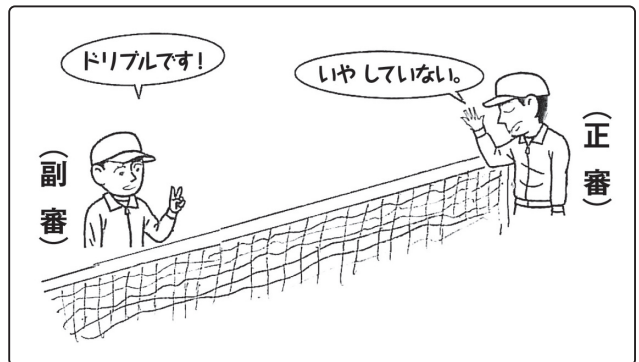
しかし、ご質問は「明らかにラケットに2回当たっていました」と言明しているにもかかわらず、正審・副審の判定が食い違ったまま、歩み寄ることが出来なかった事から、結果的に競技規則第36条（ノーカウント）第4号「その他正審が特に必要と認めた場合。」を適用して、ノーカウントにされたようですね。ここに問題があったようです。

このマッチのアンパイヤーは「ドリブル」について理解出来ているのでしょうか、最近「ドリブルはないんですね」とも聞きます。そこで、相互審判に今回の様なケースが起こっています。正審は、プレーヤーが仲間や知人の場合、あってはならないことですが、「見てなかった」「分からなかった」と正審の公平性を欠く不手際にもかかわらず、副審の「ドリブル」と判定したものを否定し、正審が根拠のないまま充分な協議をしないで「ドリブル」でないと主張しますと、ノーカウントになる可能性が大了。

審判規則第6条（アンパイヤーの任務）の第2項に「正審は、審判台の上においてマッチの進行を担当し、定められた判定区分については、他のアンパイヤーのサイン及びコールを確認した後にこれを尊重して明確にコールし、採点票に記録する。」とあり、他のアンパイヤー（副審）の判定を尊重されるなら、別の解決の道が開かれたかも知れません。

このポイント以降、正審と副審の意思の疎通が出来なくなる可能性が生じそうです。審判規則第7条（アンパイヤーの心得）の第3号のキ「当該マッチのアンパイヤー同士の連携を密にすること」を忘れないようにしましょう。なお、正審と副審の判定が食い違った場合は、必ず協議される事をお願いします。最後にアンパイヤーは公平な立場で判定に携わっていただく様気をつけたいものです。

お願いですが、ジュニア大会等はコート主任を配置しご指導いただける方向で対処下さい。



【関連規則】

審判規則第6条（アンパイヤーの任務）抜粋

第2項 正審は、審判台の上においてマッチの進行を担当し、定められた判定区分については、他のアンパイヤーのサイン及びコールを確認した後にこれを尊重して明確にコールし、採点票に記録する。

審判規則第7条（アンパイヤーの心得）抜粋

第3号キ 当該マッチのアンパイヤー同士の連携を密にすること